

アクティブ・ラーニングに 命を吹き込むファシリテーション

上井 靖

名古屋市立八王子中学校長

はじめに

私は、「主体的・対話的で深い学び」を実現するアクティブ・ラーニングに命を吹き込むには、ファシリテーションは不可欠であると思っている。

ファシリテーションは、人々の活動が容易にできるように支援し、うまくことが運ぶように舵取りすることで、あらゆる知的創造活動を支援し促進していくはたらきを意味している。特に、会議等で合意形成を図るために参加者の当事者意識をいかに引き出すか。また、教育の場でアイデアや気づきから相乗効果をいかに引き起こし深い学びを実現するか。これらの場をつくることが重要となる。

ファシリテーションで合意形成を促進するためには、各人が十分に自分の考えを発散し、そこから論

うわい やすし

愛知教育大学大学院修了。教育学修士。専門は理科教育。現在、名古屋市立八王子中学校長、NPO 日本ファシリテーション協会 教育ファシリテーション推進グループ長、名古屋市教育委員会元指導主事、NPO ファシリテーション協会前理事を務める。

著書に「ファシリテーションを軸にして対話の場をつくり組織を活性化」（『総合教育技術 5月号』小学館、2014年）、「授業にコーチングを活かす」（『コーチングとは何か』（児童心理 6月号臨時増刊、金子書房、2010年）、「授業力向上のためのコーチング、ファシリテーション研修～ Must から Will へ～」（『教師のコミュニケーション力を高めるコーチング』（千々布敏弥編著、明治図書出版、2008年）など。

点を見つけることが大切だ。私は授業の中で、学習者同士が合意形成を目指すプロセスを振り返ることにより、深い学びが実現するのではないかという仮説を立てた。そのためには、お互いの考えの背景を探り、何を解決していくのかを当事者同士で発散・収束させていくプロセスがとても重要である。このプロセスを重視した教師はファシリテーターとして、アクティブ・ラーニング型授業をデザインし実践していくことになる。ここでは中学校理科の授業で、アクティブ・ラーニングにどうファシリテーションを組み込んでいったのかを紹介する。

理科の授業で科学的合意形成に挑戦

理科は、学習者が科学を学ぶプロセスを通じて、科学的な見方・考え方を身に付け活用できることを目指す教科である。では、科学的とは何か？それは、「実証性」「再現性」「客観性」の3つを満足する見方や考え方が科学的であるということである。言い換えると、学習者同士で、科学的な要素である「実証性」「再現性」「客観性」を満たした状態に向けた「折り合い」をつける、つまり「科学的合意形成」を目指すプロセスを体験し、振り返ることによって深い学びや知見を得ることとも言える。

そこで、中学校3年の理科「力とそのはたらき」の単元で、「科学的合意形成に挑戦!」という授業を8年前にデザインし、中学生への授業だけではなく大人向けのワークショップで実践してきた。参加

者同士が予想し合ったり、実験器具を使って仮説を検証したりして、どの授業も大いに白熱した状態となった。

だれも見捨てない『学び合い』の精神

講義型中心の一斉授業では、教師は中位レベル生徒にわかりやすいように説明することが多い。そうすると、下位レベル生徒は落ちこぼれ、上位レベル生徒は吹きこぼれてしまう恐れがある。教師には、「このままではいけない。しかしカリキュラム上、進めていかなければいけない」というジレンマが生じる。このジレンマを解決するには、「教師が子どもに対して、だれも見捨てない」「子ども同士も、だれも見捨てない、関わり合うことをあきらめない」ことを重視したい。

しかし、「人前でしゃべることは苦手」「私の考えは間違っているかもしれない」「だれかが答えを言うから、それに従えばいい」と思っている内向的な生徒も存在する。この内向的な生徒が、自ら安心して発言できる場、勇気を出せる場づくりがなされれば、自発的・協働的な雰囲気はぐっと高まるのではないだろうか。この場づくりこそ、ファシリテーションの基盤でもあり、学び合いには必要不可欠である。ただ、「教え合ってごらん」では成立しない。

対話を授業に取り入れる

10年近く前に、大いに注目をあびていたフィンランド・メソッド体験ワークショップに参加した。そこでは、お互いの違いや対立を生かすための「対話」が大切にされていた。相手の考えの背景を探り合い、自分たちが何を明らかにしたいのかなどを探ることが、課題を見つけ解決する自発的・協働的な活動へとつながっていた。対話を成立させるためには、学習者同士が活動する上でのお互いが心がける心得（グランドルール）が必要と考えた。「協力し合おう、自分の考えを述べよう、相手の話をしっかり聞こう」など、協力し合うために、「自他を尊重

することが大切なんだ」というメッセージが基盤となる対話の場を授業の中心に据えることにした。

なぜ、アクティブ・ラーニングは楽しいのか

私は生徒がアクティブに学んでいる表情や姿を見ていると、とても楽しそうに見える。その楽しさを含むアクティブな状態は、何によって促されるのかを、私がデザインした授業（中学3年生理科の単元「力とエネルギー」で、既習事項や体験を活用して問題を解くアクティブ・ラーニング型授業）で実践・検証してみた。

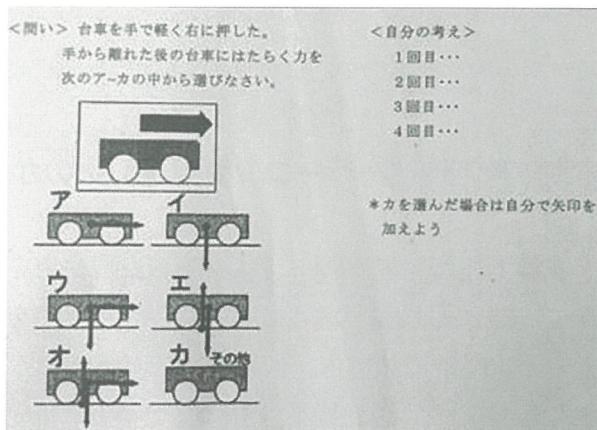
◆ “アクティブ・ラーニング型授業の実践” ～全員、ミッション遂行、『学び合い』

〈問い〉押した手から離れて動いている台車にはたらく力の矢印で正しいものはどれか？

まず、生徒はどれが正しいかを学習シートの〈自分の考え〉の第1回目に記入する。教師は生徒がア～カのどの記号を選んだかを挙手させ人数を確認。その後、「全員が同じ答えにたどり着くことを目指す!!」というミッション（成し遂げること）をこの授業の全員のゴールとした。さらに、この授業を受ける上での心得「わかったつもりでこの授業にのぞんではいけません。お互いが協力し合うことが重要なのです」と全員に伝えた。

生徒はグループの中で選んだ答えの理由を数分間、聞き合った。2回目の手あげ調査では、ばらばらだった回答が、主に「エ」と「オ」の二つに収束した。この段階から、自分の席から違うグループへ出かけ説明しに行ったり、質問し合ったり、対立した回答同士で、お互いの理論を説明し合ったり、聞き合ったりする姿が見られた。

3回目の手あげ調査では、「エ」が多数となった。生徒は多数決で決めたいかもしれないが、「心得」の存在が気になるところである。そこで私は全体に、「何がわかれば、対立している違いを克服することができるか？」と問うことにより、自分たちで論点を



【ア～カで正しいものはどれ？】

はっきりさせることを意識させた。

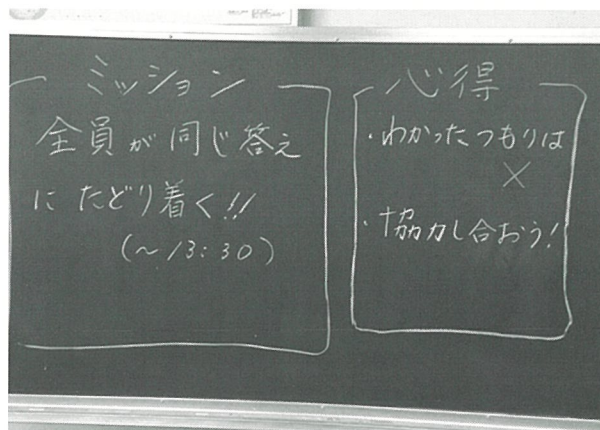
少数派の生徒は、「うーん、頭では分かるような気がするけれど、気持ちが納得しない」と漏らしていた。そうすると、先ほど多数派の記号に変わった生徒が、なかなか納得できない生徒に説明する姿が見られた。見ていてとてもうれしくなる瞬間であった。

4回目の調査では、全員が同じ答えにたどり着いた。一方、「カ」に収束したクラスがあった。力の矢印をどこから書くかがクラス全体の論点となった。その結果、抗力を表す矢印は台車と地面が接している箇所から書くことを全員が選択した。

私はクラスによって、答えが違っていても良いと思っている。それは、「摩擦や空気抵抗がないのかあるのか?」「同じ方向の力の矢印はまとめて書くことを優先するのか?いや、抗力は接して働く力なので台車と地面の接している箇所から書くことを優先するのか?」という論点、つまり前提をどう揃えるのかで答えは変わってしまう。このことに気づくことが大きな深い学びにつながる。この論点を見つけ出し、折り合いをつけることこそ、課題を見つけ解決することとも言える。ここで大事なことはこの結果ではなく、この結果にたどり着くまでのプロセスが重要である。そのことに気づくためには、最後のふり返りの時間が不可欠となる。

〈ふり返りから感想を抜粋〉

- 1人では悩んでしまうところもみんなと協力すればわかり合えることがわかった。楽しかった!



【ミッション(目標)、心得を提示】

- 自分の知らなかったことまでわかった。さらに全員が同じ答えにたどり着いた達成感があつた。
- ちゃんとわからないことは、わからないと主張したほうがスッキリするな。これからは積極的に質問していきたい。
- 皆それぞれ違う案を出し合い、ずっと考え続けている授業だったのでとても充実していた。
- 「楽しかった・悩むことができた・頭を使った」～よくわからない事も話し合いでわかった。
- これから人として必要となっている「話す・聞く」ことがしっかりでき、楽しかった。

この授業のふり返りより、学習者の学習内容の理解が進んでいることと、自発性、協働性があふれ出ていることがわかる。「自主的・対話的で深い学び」がこの授業の中であふれ出てきた。これは最終ゴールまでのプロセスが重要である。何かを教えるのではなく、生徒がいかに楽しく学んでいくかのファシリテーションのマインドとスキルに基づいたこの授業での仕掛けを紹介する。

生徒がアクティブになるための仕掛けは？

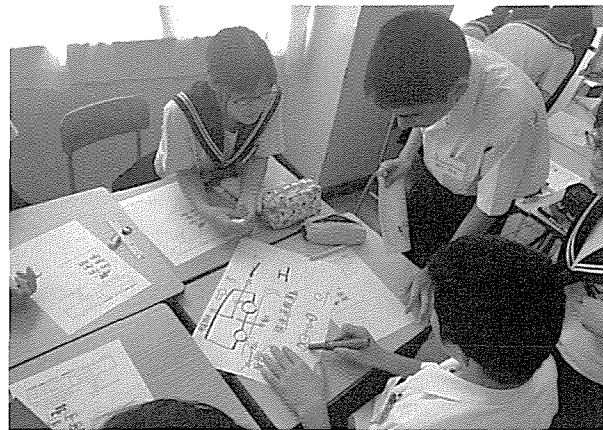
この授業に吹き込んだファシリテーションのマインドとスキルをまとめてみた。

◆ミッションの設定

教師は「全員が同じ答えにたどり着く!!」という

すねば)	ア	イ	ウ	エ	オ	カ
①	4	1	5	7	14	1
②	0	0	0	14	18	0
③	0	0	0	29	3	0
④	0	0	0	32	0	0

【手あげ調査を重ねると一つの答えに収束】



【グループを超えて聞き合う姿】

ミッション（成し遂げること）をこの授業での全員のゴールとして伝えた。自分たちが最後にどうなっていればいいのかを知ることで、どう行動しようかを考えることができる。ミッションや問いが命である。教科の専門性を発揮し、人の潜在意識やモチベーションをくすぐるミッションや問いづくりを磨き続けたい。

◆心得の設定

この授業を受ける上での心得「わかったつもりでこの授業にのぞんではいけません。お互いが協力し合うことが重要です!」は、生徒への行動規範として、ルール上を歩ませるのではなく、かつ、全くの放任でもなく、ある幅のガードレール（制限）を表している。試行錯誤しながら深めていく生徒の学びを促進している。

◆全員の考えの共有

4回の調査は、段階を経てクラス内の状況を教師だけでなく生徒自身も客観的にとらえることができる。このことが、「他の考えを聞いてみよう」「自分の考えがはっきりしたので、『わからない』と言っている人の役に立てるかもしれない」と自発的な行動にでることを促している。

◆ふり返りの場の設定

授業がスタートしゴールに到達するまでのプロセスをふり返りの中で、「なんかすっきりしない」「違和感があった」というつぶやきこそ、私たちへの問いに

発展する可能性を秘めている。これが課題を見つけることにつながる。この課題を多様なメンバーで智恵を出し合い解決していく姿こそ、未来を創る資質・能力と言えるのではないだろうか。

◆見えにくいプロセスに注力

プロセスには、目に見える流れであるプロセスと、人の思考や心情の変化などの見えにくいプロセスがある。ファシリテーターは、特に見えにくいプロセスをしっかりと観ていたい。

おわりに

アクティブ・ラーニングはこの形で進めなければならぬというものではない。いろいろな方法があってもよい。生徒が、学びの楽しさ、おもしろさ、すばらしさを実感し、未来に向けて大切だと気づく授業が必要なのだ。そうすれば、生徒の中からきつとファシリテーターが誕生してくるに違いない。■

《参考文献》

- 上井 靖 (2014) 「ファシリテーションを軸にして対話の場をつくり組織を活性化」『総合教育技術』5月号 p 28-31 小学館
- 堀 公俊 (2004) 『ファシリテーション入門』日本経済新聞社
- 西川 純 (2010) 『クラスが元気になる『学び合』スタートブック』学陽出版
- 国立教育政策研究所 (2016) 『資質・能力 理論編』東洋館出版社